日文教育資料

日常に芸術を

近藤 誠一
前文化庁長官

まなびと+ Plus

学びと教育の明日を考える

日文の実践事例、教科情報
詳しくはWebへ! 日文 検索

未来をになう子どもたちへ
日本文教出版

1946年神奈川県逗子市に生まれる。1971年東京大学教養学部教養学科イギリス科を卒業。同年東大大学院法学政治学研究科に進むが，在籍中に外務公務員採用上級試験に合格。1972年大学院を中退し外務省に入省。1973～1975年イギリス・オックスフォード大学に留学。広報文化交流部長を経て，2006～2008年ユネスコ日本政府代表部特命全権大使。2008年9月より駐デンマーク特命全権大使。2010年7月30日，文化庁長官に就任。2013年7月8日に退官。著書に『ミネルヴァのふくろうと明日の日本』『外交官のア・ラ・カルト』など。

芸術を日常で受け入れる懐の深さを養いたい

文化庁長官の任を退き，しばらくのんびりするつもりが，講演や取材依頼など予定は年末までギッシリだと苦笑する近藤誠一さん。そんな多忙極める近藤さんに，富士山の世界文化遺産登録の際にも発揮された外交手腕についてはもちろんのこと，芸術の担う役割や昨今の美術・社会科教育に至るまで，忌憚なく語っていただいた。その模様を2回に分けてお届けする。

心が豊かになる瞬間

「先日，新幹線で移動する際に，赤ちゃんを抱く若い母親と隣り合わせました。にぎやかな道中になるだろうかと身構えたところで，不意にその母子と上村松園の『母子』とが重なって見えた。もちろん，母親が着物姿だったわけでも，ましてや髪を結っていたわけでもありません。赤ちゃんを慈しむ母親の穏やかな表情が，昭和初期から平成へ，時代を超えてつながって見えたのです」

『母子』を知らず，脳裏に浮かばなければ，近藤さんは身構えたままの車中となったかもしれない。いつの世も変わらない子を思う母の佇まいが，近藤さんの心に温かい火を灯したのだ。“芸術は人生を豊かにする”とはよく言われる言葉だが，こうした瞬間にこそ“豊かさ”が潜んでいる。

「今，学校現場では，図画工作や美術の授業時間は減る一方です。英語や数学などの比重が高まり，芸術に触れる機会が減っている。そんな状況だからこそ，むしろ積極的に芸術に触れる時間を作るようにしてほしいと思いますね。家庭でも気軽に芸術の話ができるように，親も普段から芸術に接する機会を持つようにするといい。幸い，テレビやインターネット，雑誌やCDなど，芸術を取り扱うメディアは私たちの身の回りにあふれていますからね」

母子［絹本彩色／168×115.5cm／1934年］
上村松園（1875～1949年）
すだれを背に，お歯黒で青眉の女性が幼子を抱く様子を，ほぼ等身大で描いている。女手ひとつで松園を育てた母仲子が世を去った年に描かれたもので，母への追慕の念が込められていると言われる。（所蔵：東京国立近代美術館）

芸術が内包する力

芸術とひとくちに言っても，その内容はさまざまだ。詩や小説などの文芸，絵画やデザイン，写真，映像，建築などの美術，音楽や書道など多岐にわたる。マンガやアニメも芸術だ。

「私も昔は，マンガやアニメなどに眉をひそめる大人でした。初めてしっかりとアニメを見たのは，娘とフランスで見た『千と千尋の神隠し』でしたね」

映像が醸し出す日本の空気感と，文芸の素晴らしさ。近藤さんの中で凝り固まっていたアニメに対する偏見は，ふわりと溶けて消えた。そして，国外で初めて肌で感じた，日本のマンガやアニメに対する熱狂。

「日本語は“感性の言語”です。一方，フランス語は“理論の言語”の最たるものと言えるでしょう。そんな理論派のフランス人が，日本のマンガやアニメを通して，日本人特有のあいまいでわかりにくい自然観や思想を理解し，価値観を共有している。これはすごいツールだと目からウロコが落ちる思いでした」

固定観念や常識から自由になれる。感動を分かち合い，社会を変える力になる。それが芸術の内包する力だと近藤さんは言う。表現することでコミュニケーションが生まれ，互いを高め合い，才能を認められることで自己を肯定し，生きる意欲にもつながっていく。

「日本には才能ある人が多く，文化財も多数存在し，成熟した文化を抱えています。しかし教育現場では芸術を学ぶ時間が減っているように，一人ひとりの才能を磨く場が少なく，そもそもその才能に気付かない。また文化財に触れたり，学んだりする機会もシステムも不十分です。せっかく外国人も感嘆する文化芸術をはぐくんできたのですから，国際的な競争力としてもっと活用していくべきですよね」

日本文化の翻訳者

文化庁では，2011年度から「文化芸術の海外発信拠点形成事業」を開始。日本各地に文化創造と国際的発信の拠点づくりを推進するため，外国人芸術家や研究者等がある地域に一定期間滞在し，芸術作品の創造等を行うアーティスト・イン・レジデンス事業等への支援を行ってきた。こうした支援事業は1950～1960年頃に欧米でシステム化され，日本でも1990年代から主に地方自治体などが中心となって取り組んできた。

「日本もようやく，文化＝国力と捉えるに至ったということですね。日本の魅力を自ら発信することは言うまでもなく大切なことですが，国外のアーティストに来てもらって，日本で感じたことを作品に込めて発表してもらったり，“理論の言語”で発信してもらったりする方が，日本の魅力は効率的に世界へと広まっていくでしょう。彼らを支援することで，彼らは日本文

金戒光明寺
京都市左京区黒谷町に位置する浄土宗の寺院。中でも文殊塔（三重塔），木造千手観音立像（通称吉備観音），絹本著色山越阿弥陀図・地獄極楽図が重要文化財として指定されている。写真の山門は万延元年（1860年）に完成。桜上正面に後小松天皇宸翰「浄土真宗最初門」の勅額が掲げられている。

多様な文化財 活かす工夫を

化の翻訳者となってくれるのです」

1997年，44歳のトニー・ブレアが首相となったイギリスでは，「クール・ブリタニア」という呼び名のの下，国家ブランド戦略が推し進められた。その成功を受けて日本では「クール・ジャパン」が掲げられ，経済産業省が中心となって日本の文化・産業の世界進出を促進している。日本文化の多彩さを，文化庁のみならず多方面から発信する試みがなされている。

眠れる才能を掘り起こす

「インスピレーションを求めて，私はよく京都を訪ねます。タクシーの運転手さんにその時々のお勧めを伺いながら神社仏閣などを巡るのですが，いつだったか“くろ谷さん（金戒光明寺）”に行ったときのこと。どこをどう見てもイマドキの，言い方は悪いですがチャラチャラした雰囲気のカップルが観光に訪れていました。さんざんイチャイチャしつつ歩いていたその２人が山門に差しかかったとき，何とおもむろに姿勢を正し，深々と頭を垂れて一礼したのです」

歴史的にも学術的にも，もちろん芸術的にもその価値を高く評価されている文化財の数々。それらと相対するとき，人は自然と厳粛な空気をまとい，畏怖の念を抱く。近藤さんは文化財の力を強く感じたと言う。

文化財とのふれあいについて，近藤さんはこう語る。「幼い頃は，文化財の価値など分からなくてもいいのです。心の中に何かひとつでも引っ掛かりを作れたら，それで充分だと思うのです」

大人になってから思い返したとき，また同じ場所に行き，同じものを見たときに「あっ！」と感じるものがあれば，それだけで価値があるのだと近藤さんは語る。子どものうちから上質なものにたくさん触れ，心の豊かさを磨き，人間力の基盤とする。今，美術科教育に求められているのは，そうした生きる力のベースを作ることではないだろうか。

まなびと+plus
日文教育資料
平成25年（2013年）11月25日発行
編集・発行人　佐々木秀樹
発行所　日本文教出版株式会社
大阪本社　大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL：06-6692-1261
本書の無断転載・複製を禁じます。
CD33211

日本文教出版 株式会社
http://www.nichibun-g.co.jp/
大阪本社　〒558-0041　大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261　FAX:06-6606-5171
東京本社　〒165-0026　東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611　FAX:03-3389-4618
九州支社　〒810-0022　福岡市中央区薬院3-11-14
TEL:092-531-7696　FAX:092-521-3938
東海支社　〒461-0004　名古屋市東区葵1-13-18-7F・B
TEL:052-979-7260　FAX:052-979-7261
北海道出張所　〒001-0909　札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL:011-764-1201　FAX:011-764-0690